

132 ファリサイ派の人の家での教え

ルカによる福音書 14 : 1~24

前回 (No.131) は神の国に入れない者について、今回は、神の国に入れる者についての教えである。

▶安息日に水腫の人をいやす (ルカによる福音書 14 : 1~6)

01 安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。02 そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。

→水腫：浮腫、俗にむくみともいう。身体の細胞等に組織液やリンパ液が貯留した状態になる。

03 そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。

「**安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。**」

→律法の専門家たちは、モーセ五書 (創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) を研究する学者で、ファリサイ派 (分離する者、清い者を意味するヘブライ語に由来) は律法を遵守することを強調した。

→安息日は、週の第七日目 (土曜日) で、神が天地創造の後に休んだ日とされている (出エジプト記 20 : 8~10)。

04 彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。

05 そして、言われた。

「**あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。**」

06 彼らは、これに対して答えることができなかった。

▶客と招待する者への教訓 (ルカによる福音書 14 : 7~14)

07 イエスは、招待を受けた客が上席 (→招待してくれた方に一番近い席) を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。

08 「**婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、**

09 **あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。**

10 **招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。**

→箴言 25 : 6~7a

王の前でうぬぼれるな。身分の高い人々の場に立とうとするな。高貴な人の前で下座に落とされるよりも/上座に着くようにと言われる方がよい。

11 **だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。**」

【一言】婚宴 (婚礼の宴会) は1週間続くことも珍しくはない、手の込んだ行事であった。結婚する前に男女は将来結婚するという合意をし、婚約の儀式をした。日時、場所、婚礼の規模などを細かく説明する文書が作成されることもあった。結婚式そのものが非常に重要で、花嫁と花婿は美しく着飾った。地元の人々が花嫁と共に花婿の家まで行進し、花婿の家で踊ったり、音楽を演奏したり、詩を朗唱したりすることもあった。

12 また、イエスは招いてくれた人にも言われた。

「**昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。**

13 宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。

→自分にとって都合の良い人たちだけを招くのではなく、お返しをしたくてもそれができない人たちを招くのが、信仰によって義とされる、義なる行為である。

14 そうすれば、その人たちは（お返しがしたくても）お返し（をすること）ができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる（→義人の復活に与かる一関わる一ことができる）。」

→（リビング・バイブル）幸い、そういう人たちはお返しができないので、やがて神を敬う者たちの復活の日に、神があなたにその分を報いてくださるでしょう。

▶「大宴会」のたとえ（ルカによる福音書 14：15～24）

15 食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「（私たちみたいに）神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。

→この客は、愚かにも、食卓に着いている客の全員が神の国での食卓に着くことができると勝手に思い込んでいる。ところが、イエスは、そうじゃないんだ、そればかりか、思いがけない人たち—①社会から見放された人たち：罪人、徴税人（口語訳：取税人）、遊女、汚れた者等、そして②異邦人たち—が神の食卓に着くことができるのだと教えている（16節以降）。

→神の国での食事には、神が将来イスラエルの民だけでなく全世界から信仰深い人々を集める。イエスはこの時を、祝いの時である宴会にたとえている。

16 そこで、イエスは言われた。

「ある人が盛大な宴会（→メシアが支配される神の国）を催そうとして、大勢の人（→ユダヤの霊的指導者たち）を招き、17 宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。18 すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。19 ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。20 また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。

21 僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人（→一般のユダヤ人庶民）をここに連れて来なさい。』

22 やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』と言うと、23 主人は言った。『通りや小道に出て行き（→回復訳：道や垣根に出て行って）、無理にでも（たむろしている）人々（→異邦人）を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。

24 言っておくが、あの（最初に）招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』

→招待されていた人たちは、イエスがメシアであることを否定したため、神の国に入ることはできない。

この盛大な大宴会は、神の全き救いのために用意されたものです。神は「ある人」として、盛大な宴会、すなわち神の全き救いを準備されました。そして最初の使徒たちを彼の僕として、ユダヤ人を招くために遣わされました（16～17節）。しかし彼らの心は、土地、家畜、妻など、この世の富で占有されていたので、神の招待を断りました（18～20節）。そこで、神は僕たちを遣わし、町の広場や路地にたむろしていた人たち、すなわち、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人を招かれました（21～22節）。彼らはその貧しさと悲惨さのゆえに、神の招待を心から受け入れました。しかし神の救いには、もっと多くの人のための余地がありました。そこで神は僕たちをさらに遠く、道（通りや小道）と垣根に象徴される異邦人の世界へ遣わし、異邦人を無理にでも連れて来させ、彼の「救いの家」（宴会場）を満杯にされました（22—23節）。（回復訳解説を参考に一部加筆）

【参考】高ぶる者、へりくだる(遜る、謙る)者 他

< 1 > イザヤ書 2 : 12

万軍の主の日が臨む／すべて誇る者と傲慢な者に／すべて高ぶる者に——彼らは低くされる——

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 6 / 聖句等の総数 33250 <高ぶる者>6個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙 : 高ぶる者]
K ヨブ記	40:11 怒って猛威を振るい／すべて驕り高ぶる者を見れば、これを低くし	
K ヨブ記	40:12 すべて驕り高ぶる者を見れば、これを挫き／神に逆らう者を打ち倒し	
K イザヤ書	5:15 人間が卑しめられ、人はだれも低くされる。高ぶる者の目は低くされる。	
S マタイによる福音書	23:12 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。	
S ルカによる福音書	14:11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」	
S ルカによる福音書	18:14 言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」	

< 2 > 高い木を・・・

・イザヤ書 10 : 33

見よ、万軍の主なる神は／斧をもって、枝を切り落とされる。そびえ立つ木も切り倒され、高い木も倒される。

・エゼキエル書 17 : 24

そのとき、野のすべての木々は、主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、また生き生きとした木を枯らし、枯れた木を茂らせることを知るようになる。」主であるわたしがこれを語り、実行する。

< 3 > エゼキエル書 21 : 31

主なる神はこう言われる。頭巾をはずし、冠を取れ。これはこのままであるはずがない。高い者は低くされ、低い者は高くされる。

< 4 > ルカによる福音書 1 : 51～53

主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。

フィリピの信徒への手紙 2 : 5～8

互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。

人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して否定的ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教＝ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食（週2回、木曜日と金曜日）、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者（モーセ五書〈トーラー〉－創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記－を研究する学者）の多くがファリサイ派に属し、聖書（旧約）の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者（ラビ rabbi）を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシーム（パルシム）」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

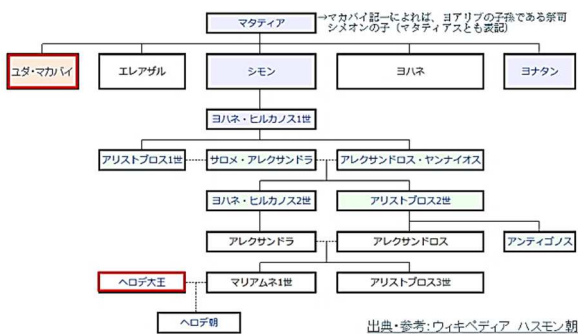
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した（ヨハネによる福音書9：22）。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった（ヨハネによる福音書3：1）。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ（マタイによる福音書26：1～5、マルコによる福音書14：1～2、ルカによる福音書22：1～6、ヨハネによる福音書11：45～57）。

エルサレム神殿の崩壊（AD70年）後はユダヤ教の主流派（神殿に拠っていたサドカイ派は消滅）となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1：BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいく。